

今回も前回聴いていただいた方や仮設で借り住まいの方、またこの日のために気仙沼の仮設住宅から1泊演奏付ツアーでいらした皆様、そして事前に希望(毎日)新聞に掲載された記事を見て来場された方など50人ほどの皆様に演奏を聴いていただきました。モーツァルトの「ディベリティメントK136」で演奏会がスタート。その後トークや楽器紹介も交えながら「愛の喜び」などクライスラーの小曲、イギリス人が編曲をした日本民謡メドレー、ソーラン節、そしてドヴォルザークの「アメリカ」などを披露しました。途中からふらりと立ち寄られた方々も立ち見て観覧されたりで、来場された皆様の微笑みや満足した顔が見られました。お客様のごく一部の方から「やや一般性に欠け、親しみにくかったのでは？」という声もありました。チェロの大澤は、「もちろんポピュラーな曲で親しんでもらうことも大切です、でも自分たちができることはクラシック音楽であり、またせっかく生でその音楽をお届けするのだから少しでもその良さに触れてもらいたい、感じてもらいたいのです」と言っていたのが印象的でした。

翌朝もメンバーは早朝から練習をしていました。陸前高田へ移動する前に気仙沼から来た人とお話をしました。以前どこかであったらろうと錯覚するほどの親しみやすい方で、いろいろとお話を聞くことができました。気仙沼の家は半壊してしまったそうで2階はなんとか無事だったそうです。やはり記憶というものは一瞬にして甦ってしまうもので時折、目を細め、また瞳は深くなり、そして声の抑揚も大きく変化しながらのお話でした。東京から気仙沼へ60年前に嫁いだそうで、若かりしころは空襲も体験しており、この度の震災は東京大空襲を彷彿させると言っていました。そして最後に「今から陸前高田へ向かうんです」と告げたところ、突然の涙を流し、「ありがとう、ありがとう」と言葉にならずとも何度も繰り返していました。



演奏後、お客様と交流する大澤(チェロ)

♪寒さ染み入る中学校の体育館で、生徒と仮設の方々の心を音楽で暖めました



「道の駅」での写真展示

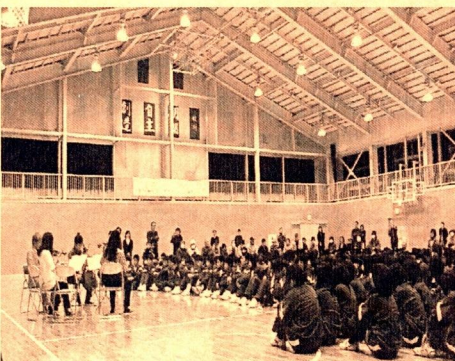
「道の駅」での写真展示
ストやジャズバンドなどの演奏があるそうです。また「日本フィルのメンバーがまさかこんなところまで来てくれるとは思わなかったので一同楽しみしている」とのことでした。極寒の体育館で生徒たちが規則正しく待機する中、メンバーが入場し、いよいよ演奏が始まります。曲目も昨日演奏したプログラム以外に、生徒向けの曲も取上げられました。「ディベリティメントK136」、「上を向いて

送迎のバスに2時間ほど揺られ、陸前高田の町に入って行きました。途中の「道の駅」には、陸前高田の震災前後の様子が写真で掲載されていて、先に述べた7万本の松など、町の豹変ぶりに背筋が凍りました。高台の頂点にある陸前高田市立第一中学校の校庭は仮設住宅の集合帯となっていました。これだけ高くないと津波は逃れられないのかとも思いました。この中学校の体育館で15時45分、授業の終了後演奏会を行いました。

佐々木校長先生のお話では、この体育館は3月11日の午前中に落成式が行われたそうです。まさにその日の午後地震による津波、その後は避難所となり、今では壊滅してしまった町の唯一の娯楽施設だそうです。9か月経った現在も頻繁にアーティ



陸前高田市立第一中学校



ヴィヴァルディ「四季」から《冬》を解説しながら演奏。そして《春》の第一楽章。最後の「ふるさと」を合唱とあつという間の1時間でした。「上を向いて歩こう」は、仮設住宅の方の涙腺を緩め、「アンパンマン」は生徒たちの身体を左右に揺らし、「ふるさと」ではみんなで声を出し会場を暖めました。

最後に佐々木校長先生のおっしゃられたことは、生徒の半分は家が流されてしまった。震災から9か月たった現在、これから厳しい初めての冬を向かえるにあたって物質的なものより心の支援が必要だ。そして今まで、全国、全世界から助けてもらった思いに、いつか必ず恩返しをしたいとのことでした。屈託のない優しく透明な方言で語られた内容は、今も忘れられません。